

令和5年8月25日

# 収穫適期早まる！

～遅れず収穫し品質を確保！～

長岡農業普及指導センター  
稲作情報 No.8

電話 0258-38-2554

E-mail ngt111440@pref.niigata.lg.jp

8/24 発表の1か月（8/26～9/25）予報では平均気温は高い確率 80%であることから、収穫適期がさらに早まることが予想されます。

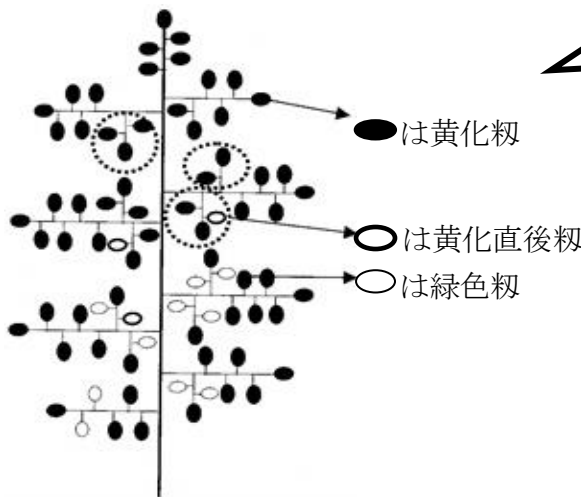
また、中生品種は、早生品種以上に登熟初期（出穂後 10 日間）の最高気温が高く推移したため胴割粒の発生が通常より多いと想定され、さらなる発生拡大が懸念されます。

**刈遅れないよう計画的に作業を実施し、胴割粒の発生を軽減しましょう！**

## 1 刈遅れによる胴割粒の発生に注意

成熟期が近づく中で強い乾燥状態が観測されており、早生品種・コシヒカリともに胴割粒発生危険性が早まっています。刈遅れに注意しましょう。

### （1）黄化籾率を確認し、適期に収穫



収穫直前に高温・乾燥が続く場合、  
点線囲みの2次枝梗に青みが残る程度の、**やや早め(黄化籾率 80%)の収穫を検討！**

通常年は、

【黄化籾率 85～90%の判定方法】

- ・収穫作業は、必ずほ場ごとに籾の黄化状況を確認する。
- ・図中の点線内（上位3～4本目の1次枝梗に着生する2次枝梗籾）が黄化した頃が収穫適期である。

図 収穫適期の黄化籾の状況

（H8 富山県農試「籾黄化の状況と刈り取り時期」より抜粋・コシヒカリ）

### （2）出穂期からの積算気温を参考に収穫準備

表 品種別出穂期と収穫適期の予想例（※収穫適期の積算気温は高温登熟年のため 50℃早めている）

品種名	出穂期(出穂期の幅)	積算気温	収穫適期のめやす
コシヒカリ	8月 3日(8/2～6)	950℃(※)	9月4日(9/3～8)
新之助	8月 8日(8/7～12)	1,000～1,050℃(※)	9月12～14日(9/11～17)

・8月23日までの気温は本年値(長岡アメダスデータ)、8月24日からの2週間は平年値+2.7～+3.8℃、それ以降は平年値+1.5℃の予測値(気象庁「向こう2週間・1か月の予測資料」)に基づいて算出。

・積算気温表は普及指導センターホームページに最新情報を掲載します。

(<https://www.pref.niigata.lg.jp/site/fukyu-top/>)

- ア 出穂後の高温により胴割粒の発生が懸念されます。今後、台風によるフェーン風等の高温・乾燥に遭遇すると、さらに胴割粒が増加するため刈遅れないよう収穫作業を実施しましょう。
- イ ほ場での胴割粒の発生が想定される場合は、通常より早めの収穫を検討・実施しましょう。

## 2 適正な乾燥・調製で品質低下を回避

### (1) 適正な乾燥作業で胴割粒の発生防止（ゆっくり乾燥）

- ア 登熟初期が高温であったことから、胴割粒が通常より発生しやすいと想定されます。張り込み直後は通風乾燥とし、夜間等気温が下がってから点火するなどし、毎時乾燥速度が0.5%以下となるように加熱乾燥しましょう。
- イ フェーン時など、収穫直後（乾燥機張り込み時）の籾水分が既に18%程度まで低下している場合は、水分のばらつきが大きく、乾燥により胴割粒の発生が助長される危険があるため、軽く通風循環した後、半日程度貯留して水分ムラを解消してから加熱乾燥しましょう。

### (2) 1.9 mm以上のふるい目や色彩選別機の活用（積極的な選別）

- 未熟粒や着色粒などが多いと予想されます。整粒歩合を高めて1等級の品位に仕上げるために、調製時の流量を少なくし、必要に応じて1.9mm以上のふるい目や色彩選別機を積極的に活用しましょう。

## 3 土づくりで次年度対策の実践

### (1) 稲わらの秋すき込みで土づくり

- ア 稲わらの秋すき込みは、堆肥施用と同等の土づくり効果が期待できます。



- イ 稲わらは、地温の高い10月中旬までにすき込みを行い、土壌微生物による分解を促しましょう。稲わらと土壌を混和するため、5~10 cm程度に浅く耕うんしましょう。
- ウ ケイ酸、リン酸が不足しているほ場では、土壌分析・診断に基づいて土づくり資材を施用するとともに、稲わらの秋すき込みを行い、効果的・経済的な土づくりに努めましょう。

### (2) 籾がら施用でケイ酸供給

- ア 籾がらはケイ酸を約20%含む有用資源であり、また土壌を膨軟化する効果があります。収量540kg/10aのほ場から得られる籾がら（約130kg/10a）をすき込むと、ケイカルを約80~100kg/10a散布したのと同様の効果が期待できます。
- イ 施用量は「各ほ場から得られた籾がらの量」を基本としましょう。
- ウ ごま葉枯病、稲こうじ病、墨黒穂病が多発生したほ場の籾がらは伝染源となる可能性があるため施用しない。また、雑草種子が多量に混入したものも施用しない。